



令和元年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

# 見沼のほとり

第 2 号

令和元年5月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

一日一生

校長 富田 敦

この5月1日をもって元号が「令和」になります。子どもたちとともに、時代の節目に立ち合えたことに深い感慨をもっています。令和には「人々が美しく、心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味があり、また、「厳しい寒さの後に春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人ひとりの日本人が明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる」という願いが込められているとのことです。私たちも希望をもち、新しい時代を創造していきたいと思えます。

先月、入学式の祝辞で本校学校評議員の大河戸千鶴子さんが「一日一生」について、お話してくださいました。

「一日一生」は、比叡山で大阿闍梨（だいあじやり）になられた酒井雄哉和尚の言葉です。酒井さんが朝行に出かけるとき、真新しい草鞋（わらじ）を履いて出かけます。一日の行が終わって夕べに帰り、履いていた草鞋がボロボロになっていることに気づく。それを見て「草鞋の一生は今日一日で終わったのだと思い、いつの日かその草鞋が自分に見えてきた。自分も今日一日の人生が終わったのだ、そして今日一日の行いを心に問いかけ反省し、また明日生まれ変わって新しい一日が始まる。自分も草鞋も一日が一生なのだ」と思われたそうです。酒井さんは若いころ、学校も勉強も大嫌い、仕事も身につかず、30歳を過ぎたころ、心配した叔母さんに連れられて比叡山にのぼり、仏教の道に入りました。ある日、師匠から「お前の残された人生を、どう生きるべきか考えよ」と言われて師匠に導かれ、これからどう生きて何をすべきかを考えたそうです。その後、千日回峰行という荒行を二回成し遂げ、大阿闍梨という高僧になりました。その高僧となられた酒井さんは自分を振り返って「若い時に一生懸命勉強しておけばよかった」と後悔し、「人にはそれぞれやらなくてはならない課題がある。自分は今何をすべきかを考え、自分に向き合って生きるべきだ」と述べています。

このように私たちは、「一日一日を大切に生き」、「自分の掲げた夢や希望に向かって努力を惜しまない」ということを改めて考えさせられました。

学校では、体育祭に向けての取組が始まりました。体育の授業の中で「大縄跳び」の練習も始まっています。何度もチャレンジするのですが、「せーの！」のあとに回数を数える声が「いちっ！」…、たまに「いちっ!、にっ！」…。2・3年生は、1年前にたくさん跳んだはずなのですが、うまくいきません。1年生は、まず1回跳ぶのが目標です。「跳ぶぞ!」という強い意志もまだ伝わってきません。気持ちもまだ充実していないのでしょう。しかし、毎年ここからスタートし、本番では気迫にあふれ、集中した大縄跳びを保護者や地域の皆様にご覧いただいています。子どもたちは目標があると短期間でぐんと成長します。私たち教職員は、子どもたちが集団として目標をもって、協力し助け合いながら確実に成長していく姿を間近にすることができます。これが教職員としての喜びでもあります。また、クラスの応援旗作りも始まっています。各クラスでデザインを考え、環境委員と有志が放課後の時間を使って作成します。応援旗は校庭を見下ろす校舎の窓に掲出されます。競技とともにご注目ください。



まだ始まったばかりの大縄跳び練習

4月の授業参観には、たくさんの保護者の皆さまに学校の様子をご覧いただきました。5月も土呂中生を見ていただく機会が多くあります。13日(月)からの学校公開週間や18日(土)の体育祭において土呂中生の実際の活動をご覧いただき、応援くださいますようお願いいたします。